

米に關するF A Oの文獻

細野 重雄

F A Oが成立してから未だ數年しかたないのに、わたくしの知るかきりでも次の四種の米に關する文獻を送り出している。

1. *Report of the Rice Study Group*. Trivandrum, Travancore State, India. 16 May—6 June, 1947 (July, 1947)
 2. *Report of the International Meeting Baguio, Philippine*. 1—13 March 1948 (April 1948)
 3. *Rice Bulletin* FAO Commodity Series No. 7. (May 1948)
 4. *Rice Bulletin* Ibid. No. 11. (Feb. 1949)
- (3)に關しては農林省總務局調査課が「世界の米穀事情とその見通し」(謄寫刷)なる抄譯を昭和三三年九月に、(4)に關しては食糧總調査課が「世界米穀事情」という名で全譯を三四年一二月に刊行している。
- 世界の米に關しては案外文獻が少ない。われわれが容易に入手できるコーブランド(一九二四)やプランケンブルグ(一九三三)の「米」は百科辭典式で便利であるが、その主力をさいた自然科

米に關するF A Oの文獻

學的な記載は古くなつて使ひものにならないし、生産、流通に關するものも米の中で、總てを理解しようという立場のものであつてあまり役に立たない。スタンフォード大學に設けられたFood Research InstituteのWickizer (1941)やBennett and Wickizer (1943)の研究が廣い視野に立つてゐるので興味深いものがあるに止まる。かかる際にF A Oの提出した米の文獻はアノブ・ツリー・シートであるとともに廣い視野に立つものであるとして、視野の限られたわれわれにとつて、それらは世界をみる窓ともいふことができよう。わが國經濟の基礎的條件たる米穀の問題を考えるとき、それは不可欠の文獻であるといつても過言ではない。

周知の如くF A O (the Food and Agriculture Organization of the United Nations)は萬國農事協會 (Institute International d'Agriculture)の後繼者である。一九四三年一月にアメリカ政府が「連合國」に對し食糧農業會議を招請したことに端を發し、一九四五年一〇月に成立したものであつて、四六年八月I I Aの解消によつて名實ともにI I Aの業務がF A Oに引繼がれることになつた。そのことは同時に「連合國」が糧食國に對する連合國であつたのが、平和的な機構を意味する「國際連合」の意味となつて、今日(一九四八)では舊糧食國たるイタリヤ、ハンガリー、フィンランドもこれに加盟し、事務局もI I Aのそののあつたローマに移されようとしてゐる。

I I Aの創立はユダヤ系一米人であるDavid Lubin (1849—1919)の努力にまつことが多い。かれは、少年時代ポーランドからアメリカに難民としてわたり、辛慘の經歷をなめたがサク

メントで商人として成功し、太平洋岸で一番大きな百貨店 (Departmentstore and mail order house) の經營者となつた。それから、たまたま果樹園を經營してみたかうまいかないので、小麥農場に買い換えたが、農業は商賣のようにうまくいかなかった。このことから農産物の價格形成の不合理なことに氣がついた。大陸横斷鐵道の運賃獨占に對して抗争した。さらに農産物や税關の船賃の不當なことを攻撃して、輸出獎勵金の交付を得ることに努めた。リバプール價格と、かれが自國の小麥エレベーターから受取る價格との差を見る毎にその差が、あまりに廣いこと矛盾を感じた。だが船賃の變動が、農産物價格を變動さすということだけは、リバプール價格の理由を説明することができなかった。かれは農産物の「國際的價格形成力」の分析に努力を傾倒した。需要は短期的な變動を除外すれば、過去の數字から豫測できるが、供給は現在の知識では知ることができない。供給は、賣りに出された農産物の量と、賣りに出されるであろうと賣手買手ともに想像する潜在的な物量と、近い將來において賣りに出されるであろうと賣手買手ともに想像する立毛中の農産物以上の三者の合計である。世界中の滯留、播種面積、作況に關する知識が少なければ少ないほど、農産物價格を決定する力の中に思惑の占める部分が多くなる。生産者は不幸なことには、そのような知識を全くまたは極く僅かしかもつていないから、生産者の操作はすべて思惑によるより他はなかつた。實在するもの、ならびに潜在する供給量の情報はいく私的に大取引業者が集め、自らの利益のためのみに利用している。世界農産物の情報で、それらの大取

引業者の獨占するということは惡である。しかのみならずその情報は不完全、不正確であつて、信頼できない。これらの情報はすべての農民が播種前に知る權利をもたねばならないし、情報は可及的完全且つ正確でなければならぬ。かくしてかれは、最初は自らの利益のために考えたことが、世界農民の共通の利益のためであることにまで發展し、その構想が農産物の國際的情報の「手形交換所」の創立ということにかたまつて來た。この考えは、かつて百貨店の一物一價主義經營の場合の如く、確固たる信念に成長し、かれはまず自國の政府に向つて運動し、それから歐洲の大國政府や學者に向つて何回となく繰返して、説得にかかつた。あるものは反對し、あるものは賛成するが困難なといつてとりあなかつた。しかし十數年にわたる努力の後、かれの熱心はイタリーのエマヌエレ三世を動かし、皇帝の命を受けて一九〇五年同國政府がローマに萬國農事協會創設會議を開催し、ここに四〇國が參加してIIAが成立した。しかしその會議には、リユビンはアメリカ代表となりえず、折角結成したIIAも外交的辭令の集まりに過ぎなかつた。

IIAの結成の基調はリユビンの天才的な洞察と努力の中にあるのであつて、世界農業の生産、貿易に關する統計及び情報を蒐集、頒布することが主目的であつた。IIAは一九〇九年度以降毎年「萬國農事統計」(International Yearbook of Agriculture)と月刊の統計を發行してやつと軌道に乗つたが、その外にあるリユビンの献身的な努力の賜ものであつた。IIAは、各國さまざまの要求から農業技術、とくに農作物病蟲害を初めとした農業災

書、農業經濟一般、協同組合、農業勞働、賃銀、保險、農業立法、農業センサスの協同研究と、情報の交換が行われることになつたが、それは世界農業の情報、蒐集、刊行を主たる業務とするものであつて、加盟國に對して農業條件の改善に關する提議は拘束力がないために不活動であり、微溫的たらざるを得なかつた。IIAの活動は、商人リユニンの構想に基いた自由貿易下の世界農業に關するもので、農民を取引業者の收奪から守る以上の効果を期待するのは無理であつた。市場の情報以外の資料は、結局市場情報を完全ならしめる資料にすぎなかつたと、わたくしは考えるものである。

IIAは第一次大戦中もその業務がさまたげられたが、今次大戦中一九四〇年以降ほとんど、完全に業務執行不可能の状態におちいり、ついに一九四六年にFAOにその業務を引繼いで四十年にわたる歴史の幕を閉じた。しかし戦時中連合國は、自國ならびに管理下にある地域の食糧事情を維持改善するため、國際的農業生産物の供給量を知る要にせまられた。しかしその情報は正常な貿易關係を促進するの必要であるよりは、むしろ食糧事情救済——そのことが主たる占領地管理業務の中核をなすもので、このためUNRRAが一九四三年の會議で、FAOと双生児の關係で誕生した——の對策を講ずるためのものである。それは農産物需給の經濟的調節を最小の犠牲でなさしめるためのものでなく、各國民の榮養、食糧及び農業生産を政治的に調節しようとする。FAOは出發の動機がIIAと異なり、實踐的性格をもち、その發言——「制富」や「使節派遣」——は拘束力をもつ。その情報は單位

の換算だけで終らず分析し、解釋する作用が要請される。加盟國に對し「國內的又は國際的活動を促進し、かつ適當な場合には勸告すべきの」(FAO憲章第一條)とする。要すればFAOはあらゆる行動が業務の前面に押し出されている。

IIAと異なる第二の點はIIAが、ソ連を加盟國としてもつたのに對し、FAOはソ連とその衛星國——たゞ一つの例外はハンガリーである——を除外していることである。IIAにおいてもソ連は協力的とはいへなかつたが、とにかく加盟していた。FAOの主目的は、その印刷物の恐らくすべての表紙に附したマーク、すなわち一個の小麦の穂に配するに *Fiat panis* (穀物をあらしめよ) なるスローガンがこれをあらわしている。IIAのマークはたんに小麦の穂三つが可憐なリボンで結びつけられているだけであるが、FAOの場合はキリスト教のスローガンの一つたる *Ergo Pan* なることばの「光」を「穀物」に變えたことの意味するキリスト教的人類愛の契機が、そこにうかがわれるのである。だがキリスト教的コスモポリタニズムが、インダーナシヨナリズムの中に生きるしかたは單純な愛だけでなく、もつと複雑なものがあるのであつて、極端な場合はエゴティズムを含むものである。それが國家や民族を超越する面と、しからざる面を併せもつていることに注意せねばならぬ。したがつてFAOの主唱者となつた國と、加盟しなかつた國においては異つた解釋があるわけである。今次の戦争において自己を主張して譲ることなき對立抗争が破壊を通じて今日の平和を克ち得たが、對立抗争の一部が消滅したといえさらに「冷たい戦争」に延長されている。

加盟しなかつた國はソ連國の多くの外にアルゼンチンがあり、加盟後脱退したブラジルがある。またIIAには加盟しなかつたがFAOに加盟したタイ國がある。FAOのフイアト・パニスにあらわれたイデオロギーだけでなく、その活動とあい容れぬ國は加盟しなかつたのであつて、そこに農産物の餘剰な國が不足する國にFAOの指揮する貿易によつて賣るだけでは、過不足を調節できないという經濟的事實、すなわち不足國においては有効需要が不足していながら穀物が足らず、飢饉に瀕した國民が多きいるという事實を解決するしかたに對して、意見が必ずしも一致していないことである。アルゼンチンやブラジルの場合は、不満足な價格でする貿易や農産物を、要救濟國に貸付けることによつては自國の農民及び全産業はプラスにならない。だが、アメリカなどの場合は要救濟國の復興によつて、將來工業製品の購買力がふえることによつてまたあり得べき投資が可能になつて、結局はプラスになるだらうし、また農産物の國內的關係は財政的操作によつて農民だけに當面の負擔をさせないよう、に處置できるといふ理由がある。IIAに加盟せずFAOに加盟した國は、當座の急場しのぎのためには加盟した方がとくになると考えたからであらう。而してイデオロギー的なものは、かかる背景の下にいつそう加盟を抑制させるであらう。換言すればFAOの精神は、みかけではIIAの場合違つてゐる面もあるが、農業たけにかぎらず農業を含めた産業のヨリ廣い、貿易的性格をもつ共通な基礎に立つものであつて、その意味においてFAOはIIAの後繼者でもある。したがつてFAOの國際連合に對する關係は、活動の面にお

いてFAOの舊國際連盟に對する關係よりもヨリ近縁的であつて國際連合の主なる衛星機關の一つとなつてゐる。

FAOの米に關する文獻の背景を描き出すと右の通りである。IIAがその長い存在にもかかわらず、米の統計は毎年及び毎月の農事統計や月報に他商品なみにとり扱う以上にです。わたくしの知る限りにおいて一冊の特別研究書をも發表しなかつたことにくらべると、FAOの米に關する特別報告の存在は驚くべき多量といわれはならぬ。周知の如く米の國際貿易は南アジア三國（ビルマ、タイ、佛印）を主とし他は數えるに足りない——臺灣と朝鮮があつたがこれは日本内地に對するもので國際貿易ではなかつた。世界人口の恐らく四割が米を主食としているにもかかわらず、その貿易は國際連盟の報告（*World Agriculture: An International Survey 1932*）によると生産高の僅か八パーセントであつて、小麥の一千二百萬ポンドであつて、小麥の四割であり、羊毛、砂糖、牛乳製品、コーヒー、生絲にも及ばない。さらに貿易の對手國もタイ米はやや國際的であるが、ビルマはインド、セイロンと佛印はフランス及びその屬領、中國に結びついておつて、貿易は特定國間の問題であつて國際的な價格決定力はきわめてりすく貿易上國際的關心をそそのことの少なからざるを得ないものであつた。IIAが市場の廣さと量において、自由な競争に立つ他の多くの商品にヨリ深い關心を示し、米について格別の興味をもたなかつたのはかかる理由によるものである。しかるに今次の戰

争は米の三大輸出國が戰場となつて輸送機構を破壊し、役畜頭數を減少せしめたことを主原因として生産並びに輸出を減少させ、わが國の米需給調節圖を破壊し、米消費地帯一般は戦争の動亂はおさまらず、米をめぐる問題は貿易を超えて政治的、經濟的な問題となつた。輸出國の米の生産は回復しつつあるが、貿易の復興は輸出國の輸出がはかばかしくいれないばかりでなく、米消費國は、輸入資金枯渇のため制約をうけている。西半球やアフリカは戦時中はかなりの米を増産したが、輸出對手國の購買力がないうために増産は頭打ちとなつてゐるのである。米の生産と貿易は世界における重大關心事となつてゐる。FAOが米に關して、IAAとちがつた行き方をするのには、FAOの性格が米の經濟が國際的な解決を要するという背景において、發揮されたことに外ならない。FAOの米に關する報告書はかかる意味をもち、その統計はかかる意味において「分析され、解釋されて」いることに先づ注意せねばならぬ。以下世界の米穀事情を知る窓という意味からできるだけ詳しく内容を紹介してみよう。

二

Report of the Rice Study Group, 1947 Washington.

米穀研究會は、一九四六年九月にコペンハーゲンで催されたFAO第二回總會において提案されたブルース委員會(FAO Preparatory Commission on World Food Proposals)同年10月ワシントンにて開催)の決議により、これに基いて設けられたものであつて、豫洲、ビルマ、中國、フランス、インド、

米に關するFAOの文獻

オランダ、ヒッピン、タイ、イギリス、アメリカ、國際連合、指定の人々——その中にわが盛水農事試験場長も數えられる——をもつて構成され、インドのタリシユ、ナスワミがチエーヤマンである。この會議は、一九四七年五月二十六日から六月六日まで、インドのトラバンコール州のトリバンダム(インドの南端西側に面し、米の主産地の一部)において開かれたもので、「五四の報告をもつて報告書をまとめあげ、チエーヤマンの名においてFAO事務局長オア卿に呈出したものである。

この報告の目標は(一)米の増産に關する技術上の問題、(二)米穀經濟上の諸要因、(三)國際的活動を必要とする問題、以上の三つである。南東アジアにおいては、基礎的な米に關する上記の研究がなされるべきであり、エキステンションに結付いた研究及び試験などもつとなされるべきである。國際的水準における行動は研究及び試験のみならず、政策において大いに必要である。統計及び經濟上の業務における改良と標準化、米の生産に用いられる機械、病蟲害の防除、精米の經濟や運搬、貯藏中の減量の改善を通じての有効供給量の増加、運搬の復興等に關して國際的な行動が必要である。さらに具體的に、例えば灌漑排水、化學肥料(これと結合せる土壌の調査)、栽培管理の方法、育種、栄養を處理によつて高めること(たとえばバーボイルド・ライス——モミのまま蒸氣を通して胚芽中のビタミン等の營養分をわれわれの喰べる胚乳中に移行させる操作をした米)、米の規格の國際的統一化、米の需給の割當、米作面積の擴張、米の倉庫の建設、國際的クレデットの設定その他あらゆる報告がなされている。報告はこのようにその

性格が主として技術的に偏しているが、割當を強調する面においてはF.A.O.の精神を體した點がうかがわれる。これらの勸告とその理由となる事項の中で興味ある二、三のものを拾ひ上げると、一、輸出米の運搬中における損失は一〇パーセントに達する。監視の不備及び取扱いの悪いことに起因するものがこれである。密貿易を加えるとさらにパーセンテージは大きくなる。

二、タイビルマ、佛印及びヒリッピン等において増産の障害となるものは、役畜の減少によるところが大きい。役畜の問題はリミティング・ファクターとなつてゐる。役畜の戦前への水準の回復は輸入が望めないから、當分は防疫につとめる程度で自然的回復をまつより仕方がないであらう。

三、移植と收穫期における臨時的な労働の不足はあえて戦時、平時の問題ではないが、三大輸出國では大きい問題となつてゐる。戦後社會狀態の變化によつて勞賃の騰貴は、この問題に拍車をかけてゐる。これらの國々では部分的、または完全に機械化することは技術的、經濟的に可能であるが、さし當つて農業機械の使用及び生産の能力がこれらの國々には欠けてゐる。

四、南東アジアの米產國はすべて政府が、協同組合の普及を推進しているが、その運動は落膽させるに足るほど遅々として進まない。これは耕作者に對する授信作用の機構が未發達であるとともに、より根本的な社會的な制約——たとえばある國では、收穫高の七五パーセントが小作料に化しているというような事實の根底に横わるもの——と耕作規模のあまりにも、零細なことに基因するであらう。

五、米の消費量の低下の甚しいことである。戦前多くのアジア諸國の一人當り米の消費高は三九七・四二五グラム（譯註約一、四〇〇—一、五〇〇カロリーに當る。國別は次節に紹介するB.O.B. Bulletinの第2表をみよ。）であつたが、戦後は一二三・一四二グラムに低つてゐる。關係政府は小麦、トウモロコシ、カツサバ、イモなどの増産を奨励している。（たとえばヒリッピンのマメ作り戦争）。米に國民營養に必要なカロリーの八割以上も依存していたマレーでは二九四六年には四六グラム（今日では一三〇グラム）となり、全穀物についても一五〇—一九四グラムとなつてゐる。セイロンでは戦前三六八グラムだつたものが、一九四六年には一三〇グラム、全穀物で二一七グラムとなつてゐる。これらの中には統計の不備もあらうが、わが國が食糧で困つた以上のもがあり、そこにF.A.O.が米を特別にとり上げねばならなかつた問題があると思う。

六、米の生産高の不足はアジア的な農業の性格の結果として、他の穀物のように戦後數年間に回復できるという見込がない。開墾による面積増加は技術的、金融的に支持を要するが、インド八一萬ヘクタール、佛印五〇萬ヘクタール、タイ四一萬ヘクタール、ヒリッピン二〇萬ヘクタールで、その他の國は問題とならない。それにしても合計二〇三萬ヘクタールであつて、中國、日本を含めた南東アジア諸國の一九五〇—五一米穀年度における不足量は差引三四五萬トン（精米換算）である。米の栽培面積の擴張は南方の米輸出國の濕地開拓を多く含むが、この地帯ではマラリヤの豫防上飲料水の獲得とともに實施する要があることを強調し、

農業機械のステーションを設置すべきことも、あわせて勧告している。

七、國內米價を安定させる方法については、多くの意見が對立した。一つは生産費説であり、一つはバリエー価格説をとる。後者は長期的に生産者價格をきめるには有効でないが、生産費算出が技術的に困難であるために、最低價格保證の手段としてはやむを得ないというのである。いすれにしても、國內及び輸出價格を保證するためには各國政府が統制をなし、恐らくは賣買者として介入しなければならないであらうとする。一方消費者のために最高價格もまたきめられねばならぬとする。そして價格に關與するあらゆる條件、ならび價格安定に關する經濟的問題の基礎的研究は、FAOが指導、組織化する要のあることを勧告している。

八、FAOの米の貿易割當制度は各國とも賛成しているが、その統制機構を南東アジア諸國の何れかに設立すべしとする意見に對しては、南東アジア以外の國は反對している。このことはFAOの性格を知るのに注目すべきことであらう。

III

Rice Policies, FAO Commodity Series No. 7 (1948)
and No. 11 (1949)

FAO加盟國はその事務局に對して、憲章の規定にもとずいて報告の義務がある。加盟國の報告とアメリカ農務省の活動による報告の統計數字を底とし、米穀研究會の勧告に回答せる各國政府の文書にもとずいて、このビュレティンは作成されたものである。

米に關するFAOの文獻

る。その特徴はFAOの性格がよくあらわれているもので、各國の米の生産、消費、貿易、價格に關する統計と米の國際貿易割當、増産計畫及び生産資材の手當に關する勧告とから成立つてゐる。FAOの月報は、IIAの統計月報と似かよつた編集ぶりであるが、統計年報は未だ實行されていない。IIAの各年の *Annual Statistical Statements* に類似の年報が發行されているが、その編集はIIAが國別及び商品別にわけて記述してあるのに對し、FAOのは國別はこれを缺き、商品別の狀態を大陸別に細かく記述してゐる點において異なる。この商品別の記載の中で、米の部分をとり上げ、その分析と説明を詳細にして、勧告を加えたものがこのコモディティ・シリーズの米である。第一號は第七號より新しく、ヨリ分析がいきとどいてゐるようであるから、一一號について紹介し、若干七號をつけ加えることとしたい。一一號は戰前(一九三四米穀年度から五ヶ年平均)と一九四八米穀年度(一九四八—四九と書く、七月に始り翌年六月末をもつて終る)との比較、七號は戰前と一九四七米穀年度との比較である。

一、世界における作付面積は一九四六年度において、すでに戰前のそれとほとんど同じで、四十七年は二パーセント、四十八年は三パーセントを上廻つてゐるが、生産高は四十六年には五パーセント減、四十七年は四パーセント減、四十八年は二パーセント約二九〇萬トン減である。供給量の減少にひきかえ、四八年度の需要は一〇パーセント増加している。米食人口が過去十年間に一億も増加しているからである。輸出國の輸出高は、戰前精米換算八五六萬トンであつたが、四十六年は二二一萬トン、四十七年は二五七萬トン、

四八年は三四一萬トンであつて、戦後の復興は大きなものがあるが、一九四九年の輸出向餘剰米の數量といえども戦前の半分にも足りない。

アジアのみにしてみると、作付面積は戦前に比し一九四六年

第1表 戦前戦後における米輸出量 (精米千トン)

地 域 別	1934—38	1946	1947	1948
ア ジ ア 計	8,104	1,272	1,562	2,336
そ の 他 計	456	938	1,008	1,074
世 界 計	8,560	2,210	2,570	3,410
アジアの比率(%)	95	58	61	68
同五大國の比率(%)	88	44	48	62

(備考) アジア五大輸出國とはビルマ・タイ・佛印・臺灣・朝鮮である。戦後最後の二國はほとんど零になつた。

が減少したことがわかる。アジア輸出國は戦場となつたか、あるいは戦後の動亂がおさまらず、とにかく戦禍を受けたことが甚し

度は二パーセント減、四七年は一パーセント減、四八年は戦前のそれを僅かに上廻つたが生産高は一九四六年度は七パーセント減、四七年は六パーセント減、四八年も五パーセント減であつた。アジアは生産高及び面積とも戦前九六パーセントを占めていたのが、戦後三ヶ年を通して九四乃至九三パーセントに減少した。輸出高についてみると第1表の如くアジアの輸出國の輸出減退のために世界輸出量

いために輸出力が減退して、米輸入國が甚しい影響を受けたのである。輸出の減退の甚だしいのは朝鮮であつて、戦前平均一六萬トンの輸出高をもつたものが通じて零となつており、これについて佛印である。戦前一二九萬トンを輸出していたのが四八年には一六萬トン、僅かに戦前の一二パーセントを輸出するにすぎない。ビルマは戦前の三〇七萬トンから四八年の一三三萬トン、四〇パーセントに、タイは二三九萬トンから八一萬トン五八パーセントに低下している。その他の國で輸出高が伸長したのは、アメリカであつて、戦前六萬八千トンしか輸出していなかつたのが四七年には四五萬トン、四八年は三八萬トンに増し、四七年にはビルマに次いで世界第二位、四八年はタイについて第三位の輸出高を示している。エチオピアは戦前一〇萬トン輸出していたが、四八年には三三萬トンに増加してアメリカに次ぎ、ブラジルは戦前五萬トンしか輸出していなかつたが四六年には二二萬トン、四七年一八萬トン、四八年二〇萬トンで四七、四八年ともにエチオピアについての輸出國となつてゐる。東洋以外では第一位の輸出國であつたイタリー(戦前一五萬トン輸出)は四八年になつて一萬八千トンの輸出をはじめとするようになった。この外、中米諸國が輸出力を増しているが、新らしく輸出を始めたものもあり、輸出國の間にかんがりの變動がみられた。

輸出國に變動があつたばかりでなく、輸出仕向先においても大きい變動がみられた。臺灣の米は輸出高は少量に減つたけれども中國本土に向けられている。アメリカ、エチオピア、ブラジル、中米等の米は戦前アジア向のものはほとんどなくなつたが、ヨーロッパ

バ向のものがほとんど零となり（一九四九年度になつて二四萬ト
 ンが歐洲向に制當動告された）そのほとんど大部分がアジアに向
 けて輸出された。このようにして、アジア消費國に米の輸出が集
 中されたけれども、依然として米の最大輸入國であるインドが一
 九四八年度に世界の輸出量中から受けた輸入量は戰前（二百萬ト
 ン）の四八パーセントにすぎない。セイロン、マレー、及びキ
 ューは米の輸入依存の高い國であつたが、米の世界輸出高の減少
 の甚だしいために國民榮養が低下した。インドネシアとヒリッピ
 ンは戰前自給の域には達してはいたが、戰爭の被害のために相
 當量の輸入を要するようになった。日本は米の輸入高において
 インドに次ぐものであつたが、一九四八年度では全然米を輸入す
 ることが許されなかつた。米の輸入國であつた南米、アフリカな
 どの諸國では米を増産してほとんど自給に達した國もある。

二、米の供給量の世界的不足のためすべての輸入國は消費基
 準の切下げを行わざるを得ず、人口増加のためこれまで自給自足
 區域もまた多く輸入地域に轉落して輸入國が増大した。一九四八
 米穀年度においては國內生産も緩慢ながら上昇し、僅かながら輸
 入量も増加する見込みなので、配給基準量はやや改善されるであ
 る。しかしその増加量だけでは配給依存者は、その保健と活動
 に足るだけの消費基準に達し得る見込みはない。統計の基礎は
 あやしげなものがあるが、第2表は米を主食とする者の比率の大
 きい國を抽出して消費基準を示すものである。食糧以外に向けら
 れる用途や自然消耗量については、從來の控除方法に従つたもの
 でかなりの信頼性があると記されている。一九四七年度の數字を

米に關するFAOの文獻

第 2 表 米を主食とする國の精米消費基準

國 別	1934-38 平均			1947		
	1人當米消費量		穀物全體から攝取する 1日1人當 熱量	1日當米消費量		穀物全體から攝取する 1日1人當 熱量
	1年當 キ	1日當 カロリー		1年當 キ	1日當 カロリー	
マレー	187.8	1,837	2,000	125.6	1,228	1,677
ビルマ	141.8	1,332	1,399	163.7	1,538	1,602
インドシナ	139.7	1,313	1,350	120.5	1,132	1,294
日本	133.8	1,257	1,527	102.4	968	1,322
セイロン	124.4	1,169	1,236	63.1	600	1,045
マダガスカル	120.9	1,136	1,287	110.3	1,037	1,148
タイ	97.6	955	966	139.4	1,363	1,370
ヒリッピン	96.6	908	1,222	78.7	740	1,095
中華民、國	86.9	817	1,623	79.5	747	1,558
ジャバ	86.2	810	1,214	67.6	635	884
インド*	79.8	750	1,317	67.7	636	1,087
キューバ	50.6	495	1,021	46.9	459	1,056

* パキスタンを含む。

みると米の生産過剩國ではインドシナを例外として、米の消費量は戰前に比して増している（インドシナの數字は戰後の穀物推定高が不確實のように思われる）。米の生産不足國では米以外の穀物消費量が増しているが、總對的カローリは低下している。過剩國、不足國を問はず、生産者がその生産物を戰前よりヨリ多量に消費していることは、専門家が等しくみとめているところであつて、生産者がヨリよい食事をとり、恩恵のため生産物を手元に保留することは都市に出廻る穀物量をヨリ少なくなっている。米不足國の政府がそれぞれ配給組織を創つて、食糧配給の統制をしているが、闇取引はいたる所盛んに行われ、それにもかかわらず米不足國の都市の榮養は、一般に一國平均の消費量の數字の示すよりもヨリ低下している。

世界において米に關し最も強調さるべき問題は、先ず一人當り消費量を戰前の水準に回復させ、ついで人口増に起因する需要に順應させるように増産をするということである。パギオの會議では米穀經濟開發三年計畫をとり上げることにした。會議に出席した一九七ヶ國政府の代表者の提出した資料によると、一九五〇米穀年度には、四七年度よりも五七〇萬トン増加する可能性があることがわかる。しかし、米食地域の年人口増加は、一千萬人もあり、毎年、一、三〇〇萬トンの米を新に増加させねばならないから、五七〇萬トンの増産では不十分である。望ましい消費水準に達するためには、一、三六〇萬トンを必要とする。このため増産の外に米の榮養度を高める手段——搗精度引下げ、バーボイル、選送及び貯藏中の損失防止の手段等——を講ぜねばならない。さらに過剰生

産國の米消費の過大は運搬、金融等の回復によつても正常状態に復歸せしめることが可能である。

三、戰爭によつて輸出國と輸入國との間の通商、輸送が攪亂され、米價の關係もゆがめられた。戰時中も戦後も米の國際的貿易は國內及び國際的に統制されてきた。國內價格はほとんどいづれの國も政府の統制下におかれていたが、輸出價格は個々の取引又はバーター協定に基きいている。各輸出國間の價格は、一九四七年にはかなりの差があつたが、四八年には縮小してきている。この理由は生産費の低い國が、ヨリ高い輸入國の生産費と同等の價格を要求する傾向があることと、硬貨で満足し得る價格を保證することが困難であることに基因することが多い。戰前には米の國際貿易は國際爲替及び國際支拂の組織によつて、輸入國は輸出國から如何なる種類の通貨を要求されても差支えなかつたのであるが、自國通貨の對外換算が出来ないために米の國際的配分に當つて支拂上の均衡に難問題を發生した。米不足國が西半球からその増大した餘剩米を誘致する能力は、對外交換物資の缺乏とドル不足のためきびしい制約をうけ、西半球の米產國は自然的、技術的條件では米の大増産を可能にしているにもかかわらず、輸出見透しの不安定に禍いされて、最大の生産力を發揮することができないでいる。内亂や政情不安のために、戰前の水準にまで米の生産が復興をはばまれていたアジアの米輸出國では、生産復興のために生産資材、交通機關、ならびにそれらの資本財の輸入を必要とするが、それは硬貨又はドルで支拂われねばならない。また農民から零細な餘剩米をかき集めるためには、センイ製品その他必

需物資が外國から輸入せられねばならない。それ故にアジアの米の輸出は輸出米の代價をドルで支拂うか、又はこれらの資本財や消費財の得られる市場を望むわけであるが、米の不足國にはそのような力が不足している。このまま放置しておく、米を主食としていない國々へ米の輸出が向けられ、米の主食國への輸出は増加しないであろう。需要標準を基礎とした米の配分方式を、國際的に發展せしめるために國際的な協力が必要です。必要となる。米の輸入國への割當は國際緊急食糧委員會 (International Emergency Food Committee) —— この委員會はFAO理事會に附屬する —— の勧告によつて定められるが、アジア米輸出國の支拂條件の難問題に當面している。ヨーロッパ向けの割當は、かかる關係の下に勧告されたものである。しかしビルマの内亂のため一九四八年後半のヨーロッパ向け輸出は止められた。米輸出國の國內米の買上と不足國への賣渡しのための統制はIEFCの割當勧告に従つてなされたものである。しかし、これらの統制の技術は舊來のままで、ベギオの國際米穀委員會の勧告による種類別ならびに等級の標準化その他取引上の能率増進のための改善はほとんどなされていないようである。

四、アジア及び極東諸國の米生産資材の必要量に關しては、一九四八年に設置されたFAOとアジア極東經濟委員會(ECAFE)の協同研究會の研究によつて明らかにせられた。三ヶ年計畫の下に立案されたものであるが、技術的ならびに市場、貯蔵等の改善に關するもので、一部はそれぞれの國の工夫によるもの例えば種子の改良であるが、他方の計畫(例えば疏安工場の設立)

米に關するFAOの文獻

は資材の輸入を必要とするもので、ヨーロッパの復興計畫と關連するものである。その中で重要なものは、用水の管理改善を第一とする。現在の水利管理方式の復興改善の程度のものから、大濕地帯の排水から洪水防止対策を含む。洪水防止についてはこの地域のためにとくに洪水防止局 (Bureau of Flood Control for Asia and the Far East) の設置を提議している。從來の用水施設の復舊と若干の擴張により、四割乃至五割の米の増産は可能であり、このためのポンプは毎年二千臺前後のものである。次に大きいのは化學肥料である。日本、朝鮮を含め七ヶ國に供給された化成窒素は戰前六一萬トンであつたが、四七米穀年度では四七萬トンであつた。四八年度には五一萬トンであるが、經濟的に必要な窒素量は九八萬トンである。磷酸は四八年度に七千トンしかなかったが、必要量は二〇萬トンである。中國とインドでは合せて五八萬トンの生産能力のある生産計畫を實施中で、その中三分の一が完成に近い。農薬及びダスター、噴霧器の要請もあるが、多くは手動用である。砒素、硫酸銅、DDT、BHC等の年間所要量は四九年一萬六千トンに達するが、そのうち供給確保はほぼできるのは日本のみである。役畜の復興とともに必要なのは、獸疫防止施設であるが、藥品だけでなく、實驗所の設置や普及の廣範な裏付けが要る。農業機械、貯蔵設備や精米に關する資材の要求は微々たるものであつて、化成窒素肥料の要請量はそれでも全世界のそのの一パーセントになるが、農薬は二パーセントであり、農業機械は〇・三パーセント、灌漑用機械や精米機の量はさらに小さいものである。FAOは生産財の要求に對し、できる限

り優先權をおたえ、食糧危機突破に協力することを勧告している。これがため適當な財政的援助もまた必要である。

五、新興米輸出國について若干の説明を附加する。アメリカの米増産は本誌所載の「アメリカにおける稻作」にゆずることとし、エジプトについてみる。エジプトでは米はナイルの灌漑地帯に栽培される。その起原はアメリカ東海岸の稻作競争者として立上つた時代にまでさかのぼれる。戦時中戦前の三倍に米の生産高がふえたのは棉作の減少によつて差せられたものである。この二つの輸出向作物は戦前から互にナイルのデルタでその立地を争いつつていたが、たいたい價格關係によつてそのノーソーは説明できた。しかし今日ではむしろ國內需要に供する小麦、トウモロコシ、粟などの生産と輸入能力の如何にかかつてゐる。エジプトにおける國民一人當り攝取カロリーは、戦前に比し一九四七年度は米においては増しているが、總體的に減少していることに注意せねばならぬ。米の生産を制限する因子としては、そのほか灌漑水の年次的な動搖があることと肥料の不足がある。また移植の比率が、ますます増加していると報告されているが、これは二毛作の進展を意味するものである。

戦時中米が増産されたフランスは、一九四六年度を最高としてやや減つてゐる。これは米不足國から確實な通貨をもつて満足な價格で支拂を受けることかたきないために、作付制限を行つたからである。エクワトルでも同様な事情にある。フランスの米は從來アルゼンチンに主として輸出されていたが、戦後は一粒もアルゼンチンには輸出していない。アルゼンチンも佛領アフリカ屬領

も戦時中輸入米の減少に對處するため、米を増産してあまり輸入しなくてもよくなつた。フランスでは國內一人當り米消費量は増加しているから、米の自然的技術的増産の餘力は充分であるが、これ以上米は増えないであらう。

イタリーは戦前アジア以外の國で、フランスに次いた生産高を示し、米輸出高はフランスの三倍、一五萬トシ弱もあつた。ところが戦争中生産が減退して、四七年までは輸出することかできなかった。四八年度に若干量輸出したのは前記の通りであるが、これは政府の施策によるもので、一人當り米消費量は減少している。政府は米を輸出し、小麦その他の穀物を輸入して、米生産者が一定量以上生産した米に對しては、報償金を支拂ふことにしている。政府は國內價格及び輸出價格ならびに精米業者の手数料を統制しているが、それが成功するか否かは小麦その他穀物の輸入高と米との比價さに依存している。

附表としてあげられた一九の統計表と挿入された二五の表は、示唆に富むものであることを附言する。

〔附記一〕 I I A に關しては左の文獻に役にたつ。

Hobson, A 1931 *The International Institute of Agriculture
An Assessment and Critical Analysis of its Organization,
Activities, and Policies of Administration* Univ. Calif. Publ.
in International Relations Vol. 2 Pp. xi+356

創立から一九二八年頃迄のことはこの本一冊でわかる。外にも書かれたものがあるが、この本に及ぶものはなさうである。

その後の業務の發達は左の色刷のグラフ集が、これをよく示している。

I. I. A. 1933 *Le Développement Integral dans ses Aspects*, Rome.

一九四〇年頃の活動の計畫は、左のパンフレットがこれを示している。

I. I. A. 1941 *A Brief Note on Current Work Done by the Different Bureaus of the I. I. A. Rome.*

I. I. A. 1941 *Program of the Work of the I. I. A. During Present Hostilities and During the Reconstruction Period. Rome.*

F A O に関してはわたくしは左の一書を得ただけであるが、沿革及び憲章の内容、國際連合との關係について簡単な紹介がある。もつともこれと日本との關連については、獨斷的な點もろかがえるという缺陷があるが F A O を知るのに便利な手引であらう。

農林省總務局調査課『國際連合食糧農業機關憲章の解説』昭和二年五月刊、八七頁、外に憲章原文三一頁つき、(農林省刊非賣品)

〔附記、二〕 以上の紹介は本誌別掲「アメリカにおける稻作の發展」「世界における米反當收量の推移」ならびに別に企畫しながら都合上實現をみなかつたベネット及びウィタジーヤ兩氏の『モンsoon・アジアの米穀經濟』の紹介と重複をさけ、現

米に關する F A O の文獻

在の世界米事情をスケッチするつもりで書いたものである、しかしながらわたくしは F A O の文獻の中から東南アジアの三大輸出國の事情を書きぬく元氣がなくなつてしまつた。三つの國ともに三年もしくはもう少し長期の復興計畫を立てて米の生産及び輸出の増加をはかつてゐる。それは生産——とくにインドシナでは治水計畫に大きなものをもつてゐる——のみならず流通部門においても政府とその財政が大きな役割をつとめるものである。これらの國々の米作農民は自らを組織してヨリ多き生産やヨリ合理的販賣に適應する力をもたない。外部からの強い支持や政府の力無くしては生産も輸出も決して期待した増加を望むことはできないであらう。しかるに國際連合に報告をした政權はタイを除いてその計畫を遂行する力を失つてしまつた。政情の不安は F A O の豫想を全く變えてしまい、見通しが立たない。われわれが近い將來にタイからの送出來の影響をうけるといふだけでこの地域をみるだけでは十全の理解というわけにはいかない。われわれに最も重要な地域の米穀事情を省筆せざるをえない。それを解明するには非 F A O 圖の解説をみる要があるが、それがわれわれの經濟圖と別のものであるのはいふまでもない。